



米国大統領選挙で共和党の副大統領候補であるサラ・ペイリンアラスカ州知事が愛用して話題となった、川崎先生がデザインしたメガネ「MP-704」。金属素材では最軽量であり、生体適合性も金の次に高いβ-チタンを採用。



© Bill Pugliano/Getty/Images News

アンチグラビティという名前の通り、反重力というアイデアを具現化したモデルが「MP-621」。長時間かけていても顔面上に負荷がかかりにくく、日本グッドデザイン賞、ドイツではIF Design Awardなど国内外いくつかの賞を受賞した。



医学博士 川崎和男が作るメガネ

世界的なデザインディレクターであり医学博士でもある川崎和男氏がデザインし、増永眼鏡が製作する「Kazuo Kawasaki Ph.D.」。昨年の米国大統領選をきっかけに広く知られるようになったメガネの魅力とは？

メガネに新たな価値をもたらした メディカルサイエンスに基づくデザイン

冒頭で紹介した増永眼鏡の高い技術とメガネ作りへの思いに触れたことで、互いに意気投合して始まった「Kazuo Kawasaki Ph.D.」。その最大の特徴は、メガネをファッションアイテムとしてだけでなく視覚補正器具・医療器具として捉え、[※]インダストリアルデザインを考えを取り入れたこと。「ファッションアイテムとしてのメガネにはインダストリアルデザインの考え方が欠落していました。そこで私が素材の開発からレンズの固定方式、ヒンジの構造などをディレクションすることでメガネにコストパフォーマンス（ファッション）とメディカル性（医療）の融合を求めたのです」

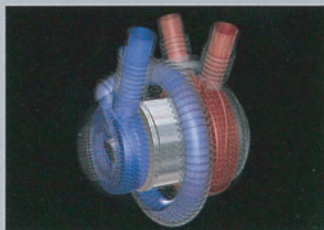
Smart&High technologyをコンセプトにかかげる「Kazuo Kawasaki Ph.D.」にとって重要なのは、そのコンセプトから生まれたデザインを具現化できる技術力。その点、増永眼鏡の技術力を川崎先生は高く評価している。「新しい先端素材を使用してフレームの構造を前例のないものとしながらも、ファッション性を求

める私のデザインをカタチにできるのは増永眼鏡しかない。金型から自社でおこして、すべての工程を一括管理できるメーカーなんて他にありませんよ。ただし、お互いに妥協せず意見をぶつけ合って喧嘩することもありますけどね」
医学博士である川崎先生ならではの視点から生まれたデザインと増永眼鏡の確かな技術。どちらが欠けても実現できないだけに、多くの著名人（ペイリン知事以外にも、パウエル元米国務長官や女優のウーピー・ゴールドバーグ）に愛用される品質の高さが、両者の信頼関係の厚さを証明している。

Other Works Of Kazuo Kawasaki

メガネ以外にも様々なプロダクトをデザインしている川崎先生。

最新の作品は、全置換型波動式人工心臓。



川崎先生がデザインを考案・設計し、東大へ提示した人工心臓「KAWASAKI G5-MODEL」。ヤギへのインプラントが成功し、実験の成果は今年の日本生体医工学会、米人工臓器学会、日本医工治療学会や日本人工臓器学会で発表される。

Kazuo Kawasaki Ph.D. 川崎和男

1949年福井県出身。デザインディレクター。心臓病を患った経緯で人工心臓を研究し、医学博士としての学位も持つ。現在は名古屋市立大学大学院名誉教授、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、大阪大学医学部附属病院・未来医療センター教授、大阪大学大学院工学科・フロンティア研究センター教授を兼任。医療に関する国家プロジェクトにも参加するなど、活躍の場はデザインに限らない。

<http://www.kazuokawasaki.jp/>



※インダストリアルデザイン…産業・工業においてユーザビリティを追求し、結果として製品の商品価値を高めることを目的としたデザイン。